

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2017年3月 NO.196



[もくじ]

- 2～3 様々な御縁にささえられて…玉木かつこ
- 4～5 人々が出会い文化が生まれる…下尾仁
- 6～7 高知城下町遺跡を掘る(二)～遺物が語る江戸時代の暮らし…浜田恵子
- 8～9 高知県立高知城歴史博物館と文化施設ネットワーク…筒井聡史
- 10～11 高知での音楽活動ートモニ、コレカラモー…森岡千晴
- 12～13 高知市文化振興事業団1月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

様々な御縁にやわやわらわで

玉木 かつこ

大学を卒業後、高知に帰って来てからもう十数年になりました。すっかり地元という言葉に根が生えつつあります。生まれは土佐市ですが、父親の仕事の関係もあり大学まで色々な場所で育ちました。土佐市、宿毛市、岡山、徳島、岐阜、高知市、そして滋賀。こうやって文字にしてみると、本当に様々な土地で生かしていただいたんだなと思います。現在は、鉄と樹脂を主な素材として立体制作およびインスタレーション、また、生活の中で使う道具や小物類を制作しています。

創り続けること

二十代の最後までずっと苦しかった。ただただ、腕き続けていたような気がします。いまだなお、腕いてはいますが、三十代になって少しずつ何かが変わり始めたような気がしています。一年間完全にモノづくりを休み、創るという

ことと向き合い直してみたことも良かったのかもしれませんが。その中で、創り続けるということが一番大切なことなのだと感じています。大学の頃お世話になった彫刻科の教授が退官される際、鉄工室で制作している私の元へわざわざやって来て話をしてくださいました。一時間程話してくれたその内容の殆どは、失礼ながら覚えていません。ただ、最後に言われた言葉だけがずっと心に残っています。「おまえこれを十年続けてみる。十年経って何もならなかったら、その時はきっぱり諦めたらいい。でも十年もやったら諦められなくなるけどな」と笑いながら。ただただ、とにかく十年は続けたいと十年はやると決めて必死にやってきた二十代はずっと苦しかった。東北の震災発生直後に京都で個展を行いました。会期中、「東京の美術館は殆ど閉まっている」と帰路途中に寄ってください

た多くの地方の学芸員や、様々な方の震災の話題と東北や関東の状況に、何も出来ない自分の未熟さを目の当たりにしました。生きることに直結しない事、それが故に出来る何か—すら出来ない自分のやっている事の無意味さを痛感しました。十年を過ぎて目標が失くなってしまった。何にもなれてないような気がした。だから辞めようと思った。しかし彼が言ったように、やはり十年も続けてしまったり他には何も無いし、なによりも創りたかった。

約一年間モノづくりと離れた後、少しずつ作品に対する考え方や制作への姿勢が自分自身変化したように思えます。

畑違いだからこそ出来ること

将来は建築・インテリア関係の仕事に就きたいと、美大の住環境デザインクラスを専攻しました。しかし入学してみると、専攻科の教授陣の話や授業に面白さを見出せず、反対に彫刻科の教授や先輩達の話に魅了され専攻科以外で受けられるアートの授業がとても面白く感じました。一回生の前期が終わる頃には、私の建築への関心は薄れ、何度か作品のご指導をいただいた彫刻科の教授にも、おまえ彫刻科に移ってこいと言われま

した。随分と悩みましたが、結局四年間専攻科を変えず授業の課題に対してオブジェを作っていた為、いつも科の教授陣には理解できないと批評されましたが、それでも無闇に否定することなく自由に作らせていただきました。四年間住環境デザインを学びながら彫刻科の鉄工室や樹脂・塗装室を使わせていただいたので、彫刻科の教授や技術指導員の方々、先輩・後輩にも随分お世話になりました。あの時の選択が本当に良かったかどうかは分かりませんが、今はアートとしての造形作品の制作と、生活の中の実用品の制作両方を手掛けています。また、大学彫刻科の先輩にグループ展出品を誘っていただいたり、専攻科の先生にお仕事をいただいたり、同期とも十年経った今違った立場で話ができ、面白いことを共に創りあげられる関係性が出来てきています。

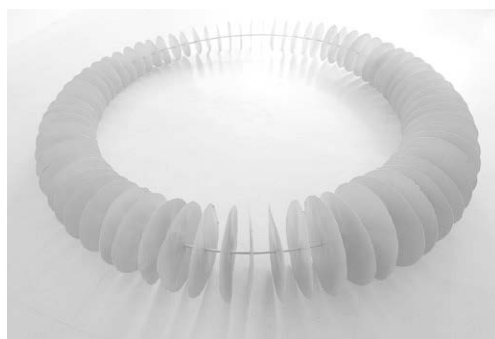
運命の出会い

浪人の秋、関西の美大受験の帰りの電車の中で、向かいの席に座ったご婦人に話しかけられました。カルトンバックを持っていた私に「美大受験ですか?」と。それから、彼女が電車を降りるまで色々な話をしました。どこを受けたの? とか、この学校も受けてみる

といいわよとか。席を立たれる際に、もし関西に来ることになったら、是非寄って下さいねと名刺をいただきました。それが京都の東山にあるギャラリー、アートスペース虹の熊谷寿美子さんでした。

結局私はその時に受けた大学に行くことになり、京都や関西のギャラリーに方々足を運ぶことになりましたが、何故かとても敷居が高いような気がしてなかなかそのギャラリーには足を踏み入れることができませんでした。初めて訪れたのは、大学三回生の時。それから何度か。訪れた際、学生の私の話も静かに聞いて、彼女が返してくださった言葉たちが、当時の私を随分勇気付けてくれました。いつか個展をするならここでと決めました。それから三回、このギャラリーで個展をさせていたいています。初めての個展の際、まだグループ展しか経験したことのない未熟な私を、一作家として扱ってくださり、様々な事に誠実に対応いただいたことが、作家として作品を発表するという責任感と自覚を抱かせてくれたように思います。その出会いのことを彼女は覚えていませんでしたが、私にとっては意味のある大切な出会いであり、今もなお、ここで展示をすること、ギャラリーを訪れて彼女に

会うことで様々な学びがあります。彼女の言動が、いつも私の大きな指針となっています。



日片 / 2014

高松市塩江美術館

二〇一六年の六月から一カ月半の会期で、香川県高松市塩江美術館で企画展示をさせていただきました。切っ掛けは、二〇一五年の秋に開催されたイノビ・オーダー555という展覧会でした。いの町内ギャラリーや倉庫、民家や空き店舗等にそれぞれ参加作家がその空間を使って作品展示をする、毎年行われているアートイベントです。琴風亭という、いの町内を見下ろす場所に作られた建物内およびその周辺で、作家の川田英二さんと共に展示をさせていただきました。

ました。知り合いの作家さんの作品を観に来られていた高松市塩江美術館の三宅学芸員が、私の展示作品と会場に置いていたポトフオリオを見て塩江美術館での展示の声をかけてくださいました。美術館の企画展示という初めての経験で随分と肩に力が入り過ぎていた私に對してご自由にやっていたですよと言ってくださり、あらゆる私の要望に構いませんよとご理解いただき、のびのびと自由にやらせていただけた事は本当に有り難いことだったと思います。またアーティストトークやワークショップ、ライブ等も企画していただき、新しい事にもチャレンジさせていただきました。この全ての経験が、私にとつてとても大きな貴重な体験となりました。また、県外の作品展示にもかかわらず画塾の後輩や沢田マンションギャラリーメンバーの方々が搬入搬出を手伝ってくださり、美術館のスタッフの皆様やDM制作のデザイン、ワークシヨップ、ライブ演奏等様々な方のお力添えをいただいて実現できた展覧会となりました。約一カ月半の会期中、香川県をはじめ高知県や四国内外からも展示を観に、多くの方々が足を運んでくださいました。

同じくこの年に、スウェーデン・

ウメオのギャラリーにて、沢マンギャラリーメンバーのグループ展に参加させていただき、私にとつては初めての海外展示が実現しました。学生時代にほんやりと描いていた夢がいくつも叶えられた、大きな節目の一年となりました。

大学時、沢山の人の関わりながらひとつの大きなものを作り上げていく仕事は自分には向いていないと建築関係の仕事を諦め、一人でもできる仕事と想って進んだ道でしたが、今は、結局どの仕事においても多くの人の支えと関わりなくして出来る仕事はないのだと痛感しています。作品を創ることは、自身の努力次第だと思いがちですが、創り続けることでいただけた御縁や人との繋がりは私の何よりの財産です。これから先の新しい出会いを楽しみにそしてこれまでの繋がりを大切に、より多くの人の心の琴線に触れることのできる作品を創り続けていきたいです。

たまき かつこ

造形作家

一九八一年、高知県土佐市生まれ。
二〇〇五年、成安造形大学住環境デザインクラス卒業。

人々が出会い文化が生まれる

下尾 仁

劇団があり、それぞれに個性、文化を生み出していることに気付かされた。

それから二十年あまり経ち、気が付けば、演劇、映画、テレビ、バレエ、ベリーダンス、アート、バンド、司会、その他、今まで切れ目なく出演させていただいている。

その中でも、これまた文化振興事業団の事業「詩のボクシング」に参加したのは、自分でもいい経験になっている。

ボクシングリングの上で、赤・青のコーナーに分かれお互いに詩を読み合い、審査員やお客さんの判定によりトーナメントを勝ち上がっていくという、見た目も内容も面白い、「まさに文化活動だ」と思ったことだ。

初めて詩のボクシングに参加したとき、あれよあれよと勝ち上がり、決勝まで進むことができた。残念ながら優勝は逃したものの、これまた表現することの楽しさを確認でき、この高知にはまだまだ僕の知らないジャンルの面白い人が沢山いるのだと気付かされることになった。

気持ちでいっぱいであった。

では、なぜ市民ミュージカルに参加したのか。…今考えてもよくわからない。何かに憑りつかれていたのかもしれない。

それはさておき、初めて参加した舞台には、何とも言えない感覚と感動を覚えた。

たいした役でもなかったが、充実感に溢れ、これが、どっかで聞いたことのある「スポットライトを浴びると、また浴びたくなる」ということかと思われた。

僕は運が良かったのか悪かったのか、ミュージカル公演の三カ月後に、またもスポットライトを浴

一九九六年、高知市文化振興事業団が企画した、市民ミュージカル「絵金」に参加したのが、僕が初めて文化というものに触れたと記憶している。

市民ミュージカルとは、演劇・ダンスなどの経験の有無に関わらず、約百人の市民が参加し、半年以上の練習を積み、オレんじホールという大ホールにてミュージカルを発表するという文化振興事業団の企画である。

もちろん自分は歌もダンスも芝居も習ったこともやったことも無く、今では考えられないが、人前で何かをするなんて、恥ずかしい

僕はサラリーマンを十二年ほどやっていたのだが、いろいろな表現活動をやっていく中で、自由に動ける時間が欲しいという思いが強くなっていき、勇気も必要だったが、サラリーマンを辞め、自由に動ける自営業の道を選んで自宅を改装したカフェを開いた。

どういうふうになっていくのかわからないが、僕の中には、お金というよりも、人々が出会い、楽しさや喜びを分かち合い、人間性を育んでいけるような空間にしたい、という気持ちがあった。

カフェを開いたばかりのときは手探りで、幾分力も入っていたが、早いものであつという間に七年が

経った。

そして、このカフェで小さいながらも文化活動といえるイベントを二カ月に一回開催させてもらっている。舞台上に一本のマイクを置き、どうぞ十分間好きなことをやってください、という「オープンマイク」形式のイベントだ。

きっかけは、詩のボクシングに参加したときに出会った詩人「瀧村鴉樹」さんが店を訪れ、オープンマイクをやりたいので場所を貸してくれないかという話からである。僕はそのときオープンマイクの意味も分からず、しかし面白そうだという直感から、ぜひやろうと相成ったわけである。



それから瀧村さんとイベントの名前やルール作りを模索し、「日曜マイク」と銘打ったイベントは二十五回を迎えることになった。

第一回目を開催するときは、ほんとに人が来るものか不安しかなかったが、あつという間に人が集まり、直ぐに僕の不安はどっかにいつてしまった。高知にはこんなにも人が表現する場所を求めているのかと思つたのである。

大体ではあるが、毎回十五二十個くらいのパフォーマンズが見られる。パフォーマンズといつても、ほんといろいろである。まだ始めたばかりのトランペットをたどたどしく吹く人や、朝採ってきたミジンコを顕微鏡でみんなに見てもらいながら微生物の解説をする人、自転車に乗っている姿を映像で写しながら店内に自転車を持ち込み自分とサイクリングをする人、引きこもりだった子がコーヒーを入れみんなに振る舞ったり、自作の詩を読み上げたり、芝居あり歌あり理解不能あり、そしてここで出会った表現者がお互いの個性を認め合いコラボが生まれたり、良い化学反応が起きている。

これはまさに僕が思い描いていた、人々が出会い楽しさや喜びを分かち合い人間性を育んでいける空間である。

僕の店の小さな活動だが、ここで出会い、ジャンルにとらわれない個性を認め合う表現が地域から始まり、また別の場所に広がっていき、心が豊かになる人が増えていけば、住みやすい世の中になっていくと僕は思っている。

小さいながらも人々が出会う文化活動が続けていきたいと思つている。

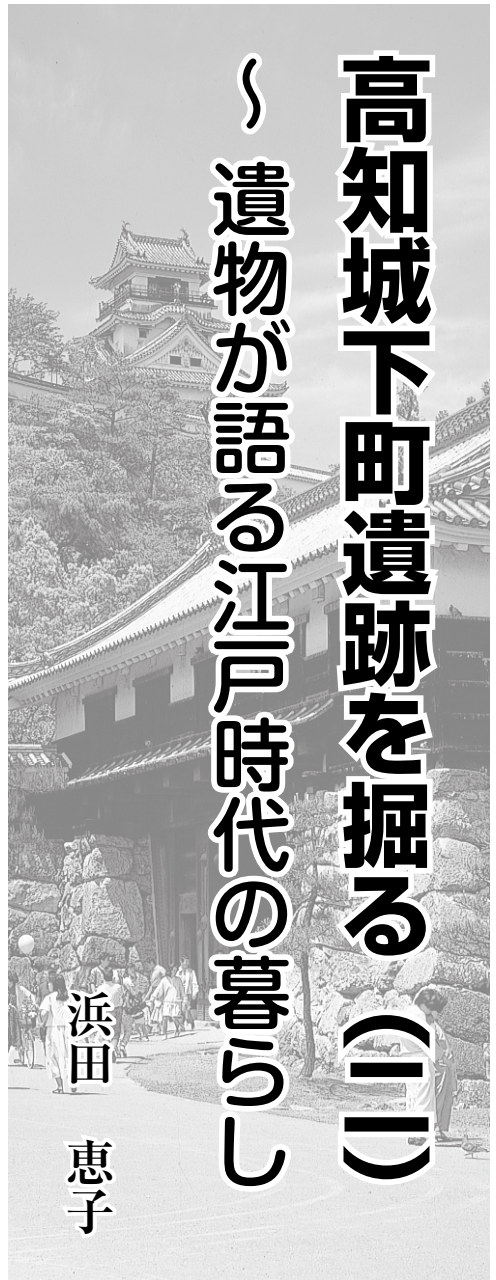


じんぜんじゅ cafe
〒780-0022 高知市北秦泉寺 30-3
11:30 ~ 18:00 (定休日: 水曜日)

しもお ひとし

一九六九年生まれ
岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

高知城下町遺跡を掘る(二) 遺物が語る江戸時代の暮らし



浜田 恵子

食

近年、高知城下町遺跡の発掘調査が進むなか、遺跡からは多くの遺物が出土しています。待屋敷跡では、大火災や居住者の移転などの出来事に際して捨てられた、建物の廃材や家財道具などの大量のごみや、日常に捨てられた生活ごみがみられています。

日常ごみの多くは、屋敷の隅に掘られたごみ穴や溝の中に捨てられており、これには食材のごみや、不要になった陶磁器や土器、木製品などの生活用具がありました。当時の人々が捨てたこれらのごみをとおして、江戸時代の暮らしがみえてきました。

待屋町遺跡の家老屋敷のごみ穴

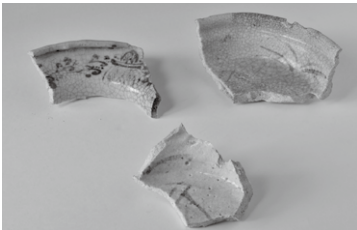
(十八世紀前半、江戸時代中期初め)には、サザエ、カキ、ハマグリ、アカニシ、サルボウなどの貝殻が大量に捨てられていました。動物の骨では、シカ、イノシシ(アタ)、鳥類などの骨片があり、これらが食用にされていたと考えられます。また愛玩用、食用の区別はつきませんがいヌの骨片も出土しています。

他には、上ランクの米をさす「吉米」^{まい}「吉粉」^{きちりふ}と下級ランクの「太米」^{まい}、酒の「諸白」^{もろはく}(清酒)などの墨書を記した木札も出土しており、各種の米や酒のやり取りがあった

ことが分かります。

侍の交際と道具

家老屋敷のごみ穴(十七世紀、江戸時代前期)には、志野焼や織部焼の向付、絵唐津の皿や水指、備前焼の盤、中国景德鎮窯系の青花皿など、茶の湯や饗応の場で使用したとみられる陶磁器が多く含まれていました。また、赤



志野焼向付

絵や金蒔絵を施した漆碗と碗蓋、漆の曲物などの上質な木製品もみられています。

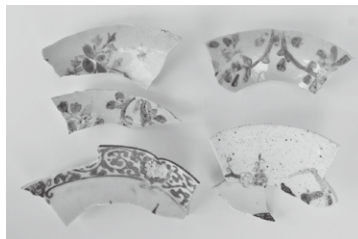
また元

禄十一年(一六九八)の大

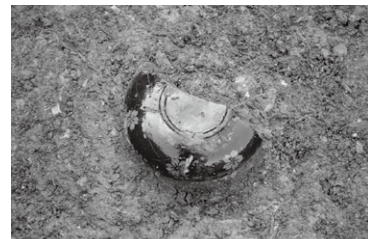
火災の直後に、焼けた瓦や家財道具を処理した焼土溜まりから

は、当時としては高級品であった肥前産の色絵皿が多数出土するとともに、藩窯の製品であった尾戸焼の皿が揃いで七個体程出土しています。

これら江戸時代前期までのごみには、茶道具や高級な食器、調度類が多くみられており、こうした道具を用いて、侍の交際やもてなしが行われた様子がうかがえます。



焼けた肥前産色絵皿



漆碗蓋

喫茶の楽しみ

江戸時代中期以降になると、茶の湯の道具である大振りの茶碗は減少し、替わって小振りの湯飲み碗が増加してきます。十八世紀後半のごみ穴からは、京都系の色絵の小碗や、肥前の染付小碗が多く出土しはじめ、陶器製の土瓶も現れます。小碗や土瓶の需要は、城下町だけでなく農村部まで広がっており、茶を煮立てて飲む習慣が定着し、喫茶が広く普及していたことを表わしています。

また、十八世紀中頃に売茶翁によって広まった煎茶は、文人趣味ともあいまって十九世紀に流行します。幕末のごみ穴からは、小碗とともに、風流な京都系の白い涼炉や手捏ねの急須が出土し、煎茶道が侍の間でたしなまれていたことがうかがわれます。

家族の暮らし

帯屋町遺跡に捨てられたごみの中には、家族が使用した日用の食器、調理具、貯蔵具、暖房具、明かりの道具、文房具、喫煙具、化粧具、玩具など、多様な用途の陶磁器・土器がありました。また、漆、曲物、桶、箸、篋、柄杓、下駄などの木製品も多く出土しました。

た。この中には、化粧道具、子ども用の下駄や玩具など、女性や子供に関わる道具も多くみえ、侍の家族の暮らしを伝えています。



下駄



柄杓

折り遊び

土人形は、まじないや民間信仰

に使用され、当時の人々の精神文化を反映させるものであったと言えます。これまで



土人形

に高知城下町遺跡から出土した土人形には、五穀豊穡と学問の神である天神、端午の節句に飾った馬、安産や子供の無事な成長を願った犬、西行、僧侶などがあり、子供の成長を願うものや縁起物が多くみられています。帯屋町遺跡でも江戸時代前期～中期の土坑や溝から、観音や僧侶などの土人形が出土しています。

遊びの道具では、江戸時代前期～中期の遺構内から碁石が出土しています。その他、池跡の幕末～明治の堆積層内から、土器や施釉土器のミニチュアや泥面子がまともって出土しました。ミニチュアは二～五cm程の大きさで、焔炉や土瓶、釜などを表わしたものがあリ、子供の飯事道具とみられます。家や塔のミニチュアは細部まで丁寧に作りこまれており、箱庭遊びに使われて楽しまれていたものです。

泥面子は、おはじきのような遊び方をしたと考えられている土器製の玩具です。出土したものは型作りで「金」「尾上」などの文字や、船、花、桐、巴文などの文様が表わされています。また「板垣」「相原」の文字を表わした泥面子は、明治十五年の岐阜事件（註一）

以降に作られたものとみられ、当時の世相が子供達のおもちゃにも映し出されています。

地中に残された様々な道具が、その時代に生きた人々の暮らしや心のありかたを、今に伝えています。

（註一）明治十五年に岐阜で、自由党党首板垣退助が暴漢の相原尚義（あいはらなおぶみ）に襲われた事件。



玩具

はまだ けいこ

高知市教育委員会 民権・文化財課

高知県立高知城歴史博物館と 文化施設ネットワーク

筒井 聡史

新博物館はじまる

高知城の麓に、土佐藩主山内家に伝来した約六万七千点の歴史資料や美術工芸品を基幹資料とする高知県立高知城歴史博物館が開館します。

これまで、この膨大な資料は土佐山内家宝物資料館（平成七年（平成二十八年）に収蔵され、同館において、資料の保存や調査・研究、展示・公開、あるいは教育普及活動等、博物館の基本的な活動を行ってきました。新しい博物館ではこれらに加えて、地域振興や観光振興への寄与という使命も担

つています。

これら多岐にわたる使命を実現するためには、県内の文化施設との連携が不可欠であると考えています。

つながる文化施設

高知県内には博物館や資料館、図書館等の様々な文化施設があります。各施設の役割や施設規模、職員構成等は多様ですが、より良いサービスの提供を目指し、それぞれ工夫を重ねながら活動しています。

しかし、多くの施設からは、実行したい活動に十分手が回らない、あるいは必要な情報が思うように手に入らない、というもどかしい声も聞こえてくるのが現状です。

このような問題を解決するためには、文化施設がお互いに手を取り合い、助け合う必要があるのではないかと、この声が上がり、ここの

五年の間にいくつかの連携組織がつくられています。

ここではその事例として、当館が参加している連携組織の内、三つを紹介します。

● ouchiミュージアムネットワーク

連携組織のなかで最大のものが「ouchiミュージアムネットワーク」（以下、ouchiネット）です。

発足のきっかけは、平成十三年の「山内一豊入国四〇〇年」にあわせ開催された文化施設の共同企画でした。この連携により、各施設が活動の新たな可能性を感じ、また文化施設の存在を強く社会にアピールできた結果、この連携を継続・発展する形で発足したのがouchiネットです。

現在の会員数は六十九（平成二十九年二月時点）で、その内訳は、県立・市町村立の資料館や美術館、図書館、動植物園、公民館の他、教育委員会等の行政機関、大学教員と実に様々です。さらには民間施設や研究機関、お寺、文化に関わる個人も加わっています。ここまではバラエティに富んだ会員が揃うネットワークは全国的にも珍しく、ouchiネット最大の特徴といえます。

ouchiネットでは四つの部会を設け、それぞれ取り組むべき課題を抽出し、時宜に応じた活動を行っています。

- ①企画調整部会は、幹事会や総会の開催、会報誌の編集を担当し、
- ②研修企画部会は、情報交換会や研修会、施設見学会を担当しています。
- ③教育普及部会は、ホームページの更新や高知市広報誌「あかるいまち」へのリレー連載、会員館職員の専門分野を記した「専門的職員リスト」作成を担当し、
- ④地域資料調査部会は、地域の歴史資料に関するアンケート調査や防災対策等を担当しています。

このような活動を通じて、まずは会員同士が知り合い、情報を共有し、さらにはお互いに研鑽を重ねることによって、結果、文化施設の活性化や県民へのサービスの向上へつなげていきたいと考えています。



情報交換会



●土佐藩・土居関係資料所蔵博物館連携協定

大所帯のこうネットに対し、テーマ性を持った小規模な連携もあります。

「土佐藩・土居関係資料所蔵博物館連携協定」は、土佐藩主・土居付家老という共通テーマを持った博物館施設が、平成二十五年に結んだ協定です。

参加しているのは、安芸市立歴史民俗資料館、佐川町立青山文庫、宿毛市立宿毛歴史館、当館の四つの博物館施設です。

この協定では、収蔵資料の情報共有、あるいは連携内での巡回展、学芸員が相互に協力して行う講座や催し等に取り組み始めています。これにより、土佐藩や家老家に関する研究の深化と、地域間の文化交流の促進につなげていきたいと考えます。

また、協定館は土佐の要衝に置かれた土居付家老をテーマに持つ施設だけあってか、地



資料の共同調査

域の歴史資料に関する相談が多く寄せられています。この全てに単館で対応するのは困難な場合が多く、四館で協力して資料整理や調査を行うこともあります。

●高知お城下文化施設の会

ここまで職員の資質向上やテーマごとの連携を紹介しましたが、昨年、文化施設と地域の関係を意識した連携組織が新たに結成されました。

高知市中心部（旧城下町）は、当館の他、オーテピア高知図書館や帯屋町チェントロ、市役所や大学等の新設やリニューアルが進んでおり、今、街の風景が大きく変わろうとしています。こうした変化の中で、中心部を「城下町」という地域として捉え、文化施設が一体となつて街に関わることができないかとの声が上ががり、「高知お城下文化施設の会」（通称…お城下ネット）としてスタートを切ることになりました。

この連携には、既存の高知城、高知県立文学館、高知市立龍馬の生誕地まちなち記念館、横山隆一記念まんが館に加え、平成三十年夏頃に開館予定のオーテピア高知図書館（高知県立図書館・高知市立

市民図書館）と同館に入る高知みらい科学館、そして当館が参加しています。



発足記念行事として「お城下ワークショップ」を開催

お城下ネットは、参加施設の活性化はもちろんのこと、街と文化施設が連携体制をとって取り組むことで、街の活性化に協力し、また旅行者を意識した活動により、観光振興にもつなげていきたいと考えています。

早速、昨年十一月に発足記念行事として、追手門前を会場にワークショップを開催しましたが、今後は、中心部の文化情報をまとめたりフレットの作成や、毎年秋に街中で様々な文化活動が行われる「お城下文化の日」という催しを行っていきます。

結びにかえて

平成三十年は明治元年から百五十年目となる節目の年です。これにあわせ、県内外で様々なイベント等が計画されていますが、文化

施設では「明治維新一五〇年高知県ミュージアム連絡協議会」という期間限定の連携組織を発足させ、明治維新をテーマとした巡回講座や人物冊子の制作等を行う予定になっています。

昨今、文化施設に対する社会からの要望は多様化し、一つの施設ではその全てに対応しきれなくなっています。文化施設としての理念を守りながらも、時宜に応じて活動していくには、多様な文化施設の臨機応変な連携が必要だと思ふのです。

冒頭で述べたように、新しい博物館の使命の一つに地域振興や観光振興への寄与という言葉が掲げられた当初、私たちは戸惑いました。しかし、これは言い換えれば博物館と社会との連携に関わる新しい試みなのであり、このことは今後の博物館にとって重要な視点の一つであると感じつつあります。

つづい さとし

高知県立高知城歴史博物館（公益財団法人土佐山内記念財団）企画課企画員

高知での音楽活動

ー トモニ、コレカラモー

森岡 千晴

初めまして。生まれも育ちも、そして今も高知に暮らし、音楽活動をしています。森岡千晴です。

私の音楽活動の始まりは、高校での選択音楽の授業がきっかけでした。それから高知大学にて軽音サークルへ入り、バンドに誘ってもらい、本格的な音楽活動がスタートしました。自分たちで音楽を作り、ライブをする。このバンドのボーカルとして活動したことが、一番の大きな転機であり、今に繋がっています。

高知での音楽活動を通じて感じていること。それは「出会い」や「つながり」が生み出す「力」です。大学を卒業して一年目、「音楽祭と地域」がテーマであった卒業論文がきっかけとなり、高知街

ラ・ラ・ラ音楽祭実行委員会（以下、ラララ）に入りました。また、その年の夏には、大学時代の同級生がきっかけとなり青年団活動に出会い、今現在も活動しています。青年団活動では、若者が動いて地域を元気に、と地域行事の企画運営に携わったり、夜学会や交流会など、世代を超えた人々が集うことのできるイベントを主催したりしています。

ラララでは、一番末っ子ポジションで多くの先輩方に可愛がってもらいながら活動しています。音楽祭を作り



ラ・ラ・ラ音楽祭にて（左が筆者）

上げるチームですが、メンバー自らも音楽活動をしている人がほとんどで、プレイヤーの目線から、世代を超えて意見が飛び交い、皆で「面白いこと」、「楽しいこと」を探索し一つの祭典を作り上げていく場がとても楽しく、いつも新鮮です。入った当初は、思い切って音楽の道への一歩を踏み出したものの、不安でいっぱいの中であつたので、自分の意見を、意志を伝える環境があるということが有難く、その場で勇気を出して発言することは、原動力の一つになつていたなと振り返っています。

そして、「自分の意志を伝える」ということや、自分はどの先どうしたいのだろうと「自分自身と向き合う」ということは、青年団活動において、最もぶつかつてきたことで、今もなお、ぶつかることもあります。自分で選んだことが、知らず知らずのうちに他力本願になつてしまつていて、ハッと立ち返ることを繰り返して。助けしてくれる人はまわりにいるのに、頼り方が分からない、と一人ですんずん進んでは結局何もできない

ことも……。大海原へ投げ出された途端、これまで舵を取るということを、どれだけ人任せにしてしまつていたかを痛感しました。そんな、経験を積み重ねる中で、「出会い」や「つながり」が生み出す力には、何度も救われてきました。

昨年、安全安心のまちづくりを高知市中心に、県下全域で行っている「みのり会」の皆さんと、活動十周年を記念した交通安全のテーマソングを制作しました。青年団のメンバーと共に、みのり会の皆さんに取材を重ね、また実際に朝の交通安全指導に参加しました。二十年間、毎朝交通安全指導をされている門谷芳子さんは「小学生たちから元気をもらおう。しんどいと思う日があつても、やっぱりあの子は、今日は元気かなと会いたくなる」とおっしゃいました。また、子どもたちも門谷さんに毎日の中で起きること、少し困っていることなどを、話してくれることがあるそうです。そんなインタビューや実際に体験して感じたことが歌になっていきました。

普段なかなか話す機会のなかつ



110 番の日イベント 朝の交通安全指導にて（左から3人目が筆者）

た世代、職種の人々とのやりとりを通じて、気持ちに寄り添って作詞や作曲を進めていく過程は、これまで体験したことのない感覚でした。何より、人とのやりとりの中で、自分の固定観念を超えていく、相手と起こす化学反応に歓びを感じました。それはきっと今までも機会があったのですが、自分が相手を受け止めようとしていなかったのかな、と思うと、大学時代のバンドメンバーの顔が浮かびました。

完成した歌は、みのり会の皆さんと練習し、様々な場所で披露しています。また、今年一月に行われた110番の日イベントでは、高知南警察署の署員の皆さんと、杉の子第2幼稚園の皆さんと一緒に歌うことができました。相手の気持ちを受け止めること。自分の中にある考えを超えて、一つ一つ形にしていきたいと、強く思います。

「出会い」や「つながり」により相手と一緒に起こす力、相手からもらう力。また、自分の意志を伝えること、自分自身と向き合うことから生まれる力は、私の生み出す音楽の源となりました。

青年団活動の中で、震災後、毎年行っている東北訪問。仮設住宅に暮らす皆さんとの交流や、みちのくよさこいへの参加を中心としたプロジェクトにて。青年団、学生が中心となり進める、年に一度のこの大きなプロジェクトの中でも、昨年、歌を制作しました。つながりはどんどん広がり、楽しいけれど、様々な人の想いが交差し、しがらみになってしまふこと

もあり、逃げ出したくなることもあります。自分ができること、自分がしたいこと、今やらなくてはいけないことと向き合う学生たちの気持ち、人々とのやりとりの中で私自身が感じたこと。それは、プロジェクトテーマとタイトルを同じくし、「航—トモニ、コレカラモ—」という歌になりました。メンバー一人一人からもらった力を紡いでいった歌だからこそ、自分自身も苦しいとき、しんどいと思う時にはいつも頭に歌詞が浮かび、曲が流れ、奮い立たされます。中途半端な心では歌えない、そんな特別な歌となりました。

高知での音楽活動を始めて約七年、今、このような環境にいることが、支えてくれる人たちがいることが、とてつもなく有難いと感じます。振り返ると、いつも一人ではなかったじゃないか、と思います。

これから先。たくさんさんの「出会い」があり、「つながり」は広がっていく中で。人と人から生まれる力を、自分の歌を通じてつないでいきたいです。

夢を目標に、形に変えていく日々を。まわりにいる人たちとトモニ、コレカラモ。

高知のみなさん、これからもうぞよろしく願います。



もりおか ちはる

高知県出身、在住のシンガーソングライター。大学卒業後、高知県内中心にCHIHARUとして活動中。

1月の事業から

卵をとるのはだあれ？

二〇一七年一月十五日（日）かるぽーと大ホールにて、劇団KIO「卵をとるのはだあれ？」を上演しました。風も強く、新年を迎えて一番の寒さではないかという日でしたが、元氣いっぱいのごもたちが来場してくれました。

関西を中心に学校での芸術鑑賞会などで公演を行っているKIOの皆さん。普段の観客は毎日一緒に学校生活を送っている生徒たちですが、今回は見ず知らずの人達が観客であることを鑑み、客席からキャストが現れるスペシャルバージョンで会場がひとつになりました。上演中は、客席で観客に話しかけるネコや、卵博士と呼ばれてステージに上がるこどももいて、決して舞台上だけでは進行しない、一体感のある公演でした。はじめこそ、お面をつけたカエルやネコに小さなこどもが泣いてしまう場面もありましたが、卵博士の「泣け、もつと泣け。小さいときは泣くのが仕事だ」という言葉の後は不思議と泣き止み、小学生のお兄ちゃんやお姉ちゃんと一緒にのめり込んでいく様子はとても印象的でした。

終演後は、舞台道具の卵や、能面作家手作りのお面を出演者から手渡してもらい、記念撮影をしている様子があちこちで見られました。



初演から二十年を超えた今も、様々な学校や劇場で上演されているこの演目だったからこそ、観劇することは、楽しく面白いものに出会うきっかけになると、こどもたちにも知ってもらえる機会になったのではないかと思います。

〈入場者数・二百人〉

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul^{カル}チャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間3,000円（4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで）

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

WORKS—それぞれの仕事— 高知県内若手陶芸家の作品展

正月明けの一月十四日（土）から二十二日（日）まで、かるぽーと七階市民ギャラリー第一展示室において、県内若手陶芸家の作品展を開催しました。

本事業は、平成十七年度より当文化振興事業団が取り組んでいる若手美術家支援・



育成事業の一環として企画されたもので、今回は近年活躍が注目されている若手陶芸家を取り上げ、その活動と作品を紹介しました。参加作家は、西田宣生・広川絵麻・森田浩路・久川創・堅田貴治・森山蘭子の六人。

タイトルにある「WORKS」には、仕事なり作品という意味があります。このタイトルが示す通り、会場には、それぞれ全くタイプの異なる作品が、独特のバランスと調和で並べられ、来場者の目を楽しませました。

来場者の中には、どこの土を使っているのか、釉薬は何を使っているのか、どんな技法で造形しているのか、窯は何窯なのかなど熱心に質問したり、作家から直接、制作過程について説明を受けたりとあちこちで熱心に話し込む姿が見られ、作家と来場者の交流の場として終日にぎわいを見せました。

会場には知人・友人たちも数多くおとずれ、温かい励ましの言葉に、作家たちも勇気づけられたようです。

今後も自分の作品と真摯に向き合い、さらなる活躍を期待したいと思います。

（入場者数・千三百九十五名）

高知市文化振興事業団 出版物のご案内



土佐自由民権運動史

外崎光広 著

—民主主義が人類の永遠の課題であるかぎり、自由民権の意義が消えることはない

著者の四十年に及ぶ研究を集成。新資料による知見も盛り込みながら、土佐自由民権運動の全容を通史として明らかにした。（平成四年刊）

価格 2,936 円（本体価格 2,719 円＋消費税）

読み物から研究書まで。地域の芸術・文化に関わりの深い書籍たち
高知市文化振興事業団出版物 詳しくはホームページまたは088-883-5071 へ

呪い



風俗歳時記

まあ、恐ろしいタイトル……と想像された方もいらっしゃるのでは？ お話は、やや軽めなのでご容赦を。最近、印象深いシーンでは、昨年の秋クールで大ヒットしたドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』の中のセリフ・部長代理役の石田ゆり子（後輩の女性社員から「あなたの年の半分なので」と反発され、「自分で呪いをかけないで」と諭すシーンで使われた容姿は石田ゆり子とは似ても似つかない私だが、役職とアラフィフという点だけは同じ（笑）。私の年の半分がそれ以下の若者が、入社してくる状況を毎年見ながら、若いなあ……と静観していたが、「うんうん、若さで勝負できるという呪い、いつまでも解けないと思ったら大間

違いよ」とドラマを見ながら共感した。では、「若い」というのはいったいいつまでなのだろう。大学生の娘に聞いたところ、「大学の各学年のことを、一姫、二女、三ババ、屍（しかばね）って呼ぶのよ」と笑っていた。じゃあ、私は屍以上？ そういえば中学生の頃には、「ティーンじゃないとオバさんやきね」と言っていたっけ。今も若い子たちは、そういう感覚なのか。東京都の小池知事について、あるコラムでは、「まだ六十四歳なので、まだまだ総理は狙える……」とあり、「六十四歳はまた若いのか」と認識したばかりだったのに。小池知事にオバさんなどと言えば、それこそ呪われそうだ。

「ここまでは皆さん、「のろい」と読まれてきたと思うが、この漢字のもう一つの読み方は、「まじない」。「のろい」というと、悪意が感じられる。しかし「呪い」は、そもそも「まじない」から来ていて、神仏などの力を借りて、災いや病気などを起こしたり、取り除いたりすることと広辞苑には記されている。科学的根拠とは別次元で、時節柄、行事、恵方など、古くからの言い伝えや神仏を大切にしてきた日本人にとって「呪い」は生活に深く根付いている。

（立花香）



高知を撮る

第32回写真コンテスト入賞作品

はし拳の女王

（平成27年4月 安芸市内原野）

つつじ祭りの行事の一環で、はし拳大会が行われました。91歳だという女性は、この道50年だそうです。とてもエネルギーが溢れてステキな方でした。

横山 幸代

なんでもパーカッションととんでもサーカス

～なんとも珍しい打楽器とまったく新しいサーカスの聴く・観るアート～



「楽しい！」を共通のテーマに出会った打楽器と現代サーカスが繰り広げるファンタジーワールド。6人の男達が、絶妙なコンビネーションとテクニックで、笑いと感動の不思議空間を創り上げます。

【日 時】2017年4月30日(日) 13:30 開場 14:00 開演
【会 場】高知市文化プラザかるぼーと 小ホール
【入 場 料】前売り 一般 1,500円 高校生以下 1,000円 (当日各 500円増)

〇お問い合わせ：高知市文化振興事業団 088-883-5071

風 伯

両手を使う

するときも片手で取り上げたりはせず、必ずもう一方の手を添えることを忘れなかつたし、お茶やお酒を飲むときも片手を添えて両手で飲む場面もある。自動ドアが増え、片手さえも使わないうが、片手だけをタッチするだけで開くドアも増え、楽になり便利になり、益々両手を使う脳の一部分が退化してい

知人と話をしていて「最近の日本人は両手を使わなくなった」という言葉が出てきて、ハツとさせられた。決して日本だけの問題ではないと思うが、確かにむかしは、茶道をやっている人だけでなく、格子戸や襖を開めるときは、決して後ろ手や片手では開めなかった。お皿やお茶碗などを拝見

く思いがする。手動の引き戸を開けても閉めずに出入りする人を最近よく見かける。閉めてもしっかり閉められない。片手でさえ、しっかり使えないのだ。名刺や贈り物を手渡し場合でも片手である。最近では食事をするときに、利き手だけしかテーブルに乗っていない人も少なくない。食べるもので身体が作られる、その料理を作るのは両手である。両手を使うのは丁寧なことではなく、人間にとってとても大事なことはない人でも、神社仏閣にお参りして祈るときは必ず両手で祈る。母親が子供を抱くときも必ず両手を使う。恋人を抱くときも片手で抱く人はいないだろう。利き手は空気のように必要不可欠で役に立つ。利き手でないもう一方の手は目に見えて役立つ役割はないが、感情や優しさ、丁寧さなど、人の心の状態を映す鏡のようでもある。(霖)

第33回

写真コンテスト 「高知を撮る」 入選作品展

このコンテストでは、毎回「高知」をテーマにした写真を募集しています。

今回は「記録写真部門」と「I LOVE 高知部門」にご応募いただきました 284 点の作品の中から、審査で選ばれた特選 4 点、準特選 20 点を含む、入選作品 65 点を展示します。

ぜひご来場いただき、過去から現在に至るさまざまな高知の写真をお楽しみください。

■日時
3月21日(火)～26日(日)
10:00～17:00
※21日10時より表彰式を行います。

■会場
高知市文化プラザかるぼーと
7階市民ギャラリー・第4展示室

■入場料
無料

■お問い合わせ
高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「極彩色」

長野奈津実

高知についての様々な情報や文化を発信している機関誌とのことだったので、それを複数の色で表わそうと思いました。

また、絵の具を紙の上部にためて垂らし、木の形を描くことで、文化高知のこれからの発展の願いも込めました。

(ながの なつみ/留学生(バラグアイ))

第69回高知市文化祭開幕行事



マンドリンオーケストラが描く 幻想と物語

● 曲目 ●

ピアノとマンドリンオーケストラのための幻想曲 (作曲: 久保田 孝)
長谷雄卿絵巻による音楽物語「朱雀門」 (作曲: 鈴木 静一) 他

● 演奏 ●

高知マンドリン土曜日会



Guest
杉本 成美 (ピアノ)



Guest
井上 琢己 (語り手)



2017年4月9日 日

[開場] 13:30 [開演] 14:00

高知市文化プラザかるぽーと(大ホール)

お問い合わせ: 高知市文化振興事業団 TEL (088) 883-5071

● 入場料 ●

一般 前売 1,000円
// 当日 1,500円
高校生以下 500円

※未就学児童入場不可。託児所利用希望の方は、
高知マンドリン土曜日会(下記メールアドレス)までご連絡下さい。

主 催 高知市文化祭執行委員会 高知市文化協会 高知マンドリン土曜日会 (E kochimandolindoyoubikai@yahoo.co.jp)

主 管 公益財団法人高知市文化振興事業団 高知市教育委員会

後 援 高知新聞社 NHK高知放送局 RKC高知放送 KUTVテレビ高知 KSSさんさんテレビ KCB高知ケーブルテレビ エフエム高知

チケット取扱 高知プレイガイド 県民文化ホール 楽器堂オーバスクラブ 高知大丸プレイガイド かるぽーとミュージアムショップ